

# 東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第六號 第十四卷

昭和十三年六月一日發行

## 論叢

箱館における缺乏品貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

清算貿易制の理論……………經濟學博士 谷口吉彦

共同體思想の生的基礎……………經濟學博士 石川興二

## 時論

消費節約の問題……………文學博士 高田保馬

## 研究

ホップスの租稅論とその周圍……………經濟學士 島 恭彦

利子率を含む經濟擴張論……………經濟學士 飯田藤次

エツヂワースと誤差法則……………經濟學士 馬場吉行

近世絞油業の發達……………經濟學士 住谷勇二

## 說苑

損害率と保險料率との相關關係……………經濟學士 佐波宣平

臨時稅法の整理……………經濟學博士 汐見三郎

## 附錄

雜報・外國雜誌論題  
本誌第四十六卷總目錄

(禁轉載)

# 共同體思想の生的基礎

石川 興 二

明治維新の初めに於て、「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振基スヘシ」と云ふことを、我國の學問的發展の指導原理とした我國は、先づヨーロッパ思想を取り入れることに今日まで専念し來つたのである。かくして取入れ來つた主なるものは、社會本位の思想と國權本位の思想とであつた。これを現代の中心問題たる資本主義社會の變革について云へば、資本主義は第三階級の立場に立つてこれを保持せんとするものであり、社會主義は第四階級の立場に立つてこれを變革せんとするものであつて、孰れも階級社會の立場に立てるものである。これに對してフアシズムは國家權力の立場より資本主義社會に對するものである。西歐諸國の今日の混亂は、これを思想的に見れば、この資本主義と社會主義とフアシズムとの對立抗争にあると云ふことが出来る。

今日までの日本は、これ等の思想を西歐より取入れたのみであつて、未だ自己の國民的性格に即する思想體系を確立し得ない。従つて現代の變革期に處すべき確乎たる指導原理を把持して居ないのであつて、こゝに現代日本の最大弱點が存するのである。

嘗て述べたるが如く、<sup>1)</sup>現代は市民社會の共同體的變革期として、共同體的思想の確立が重要であるのみならず更にその國體が社會的でもなく國權的でもなく共同體である我國にとつては共同體的變革思想の確立と云ふことが特に重要である。

この共同體思想を確立せんとせば、一度その根源にまで遡つて考察しなければならぬのであるが、この根源は、究極的に有史前の共同體である。従つて共同體思想はこの原始共同體との聯關に於てはじめてこれを十分に理解し得ると共にまたこれを確立することが出来るのである。

即ち原始共同體なるものは、未發展なる生として、その構成は子供の生にも譬へらるべきものである。かくてそれは無規定な豊富な生として、一様性を有する。子供はその豊富な多面的な生を特定の方向に於て發展せしめ行くことによつて、その成長するに従ひ、各人の性格の相異を現はし來るのであるが、これと同様に有史後の成長せる國民の生の異なる構成は、その原始共同體の多面的な生を特定の方向に規定し行くものとして見られるのである。従つてこの原始共同體よりの發展の仕方の相違によつてその生の共同體的性格は定まる。即ちこの發展に於て原始共同體との關聯が保たれてゐる生は、共同體的性格を保有し、これに反し原始共同體との聯關の中断された生は共同體的性格を十分に有しない。然るに思想は生の表現である。故に前者の生に於ては具體的な共同體的思想が成立するが、後者の生に於ては成立し得ない。更に原始共同體との聯關が保たれてゐるものに於ても、この聯關の仕方の相違によりその生の共同體的性格が異なり従つてその生の表現としての共同體思想の性格が異なる。かくる意味に於て原始共同體なるものは、共同體思想成立の生的基礎を規定する。かくて日本の國

1) 拙稿『現代變革期に於ける日本國民經濟學の意義』(本誌昭和十二年七月號)參照。

民思想の共同體的性格も、その生の原始共同體との聯關に於てはじめてこれを十分に理解し得るのである。

次に今日までの共同體思想の理解が原始共同體との聯關に於てはじめて十分に達し得られると共に、今日の共同體思想の確立も亦原始共同體との聯關に於てはじめて爲し得られるのである。即ち今日共同體を實現すると云ふことは、その根本に於て、*in sich* な共同體としての原始共同體を國權本位の中世と社會本位の現代とを通じて *an und für sich* に回復する意味を有する<sup>1)</sup>。かゝる意味に於て、原始共同體は、共同體思想の生的基礎をなすのである。かくて我國今日の共同體思想の確立の爲めにも、原始共同體そのものを究明することが重要である。

日本については、原始共同體の研究も十分なされて居ない。然し前述せし如く、原始共同體なるものは、無規定的豊富な生として一様性を有する。故に他國民についての原始共同體の研究も自國民の原始共同體を究明することとなる。而もこの原始共同體が、其後に發展せし構造には、日本獨特のものがあつて、これが日本國民の共同體の構造を獨特に規定して居り、この上に日本的な共同體思想が成立してゐる。かくてこの共同體思想の日本的性格は、他國民との比較研究によりはじめて明確にし得るのである。故にこゝには先づ歐洲思想を代表するところの古典ギリシヤ並に西歐諸國民についてその思想の共同體的性格を、その成立の基礎たる生の原始共同體に對する關聯より明にしよう。

## 二

ヨーロッパに於て、共同體的變革思想をはじめて學的に確立せしめたものは、ギリシヤであるが故に、先づギ

1) 拙稿『新國民主義と國民共同體』(本誌昭和十二年一月號)參照。

リシヤの生の共同體的性格との聯關に於て、その共同體的思想を理解したいと思ふ。而してこの思想はアテネに於て成立したのであるが故に、こゝには先づこのギリシヤの生の共同體の構造をアテネを中心として見なければならぬ。このアテネの制度は、氏族及び種族の組織に關するあらゆる點で、ギリシヤに於ける古代社會の終焉に至るまでギリシヤの制度の典型であつた。加之共同體一般の典型的なものとして、これについて考察することは共同體そのもの本質を明にする上についても重要である。

有史時代の初期に於てアッテイカのイオニア種族は、共同の地域を占めてゐる四種族に細分されてゐた。彼等は既に、種族聯合體と異なる一國民に合體してゐた。その社會制度は次のやうな連續をなしてゐた。第一に、血縁に基く氏族 *tribes* 第二に、恐らく分解作用によつて本來の氏族から生じたる氏族間の同胞組織としての部族 *phylae* 第三に、數個の部族から成りその族員が同一の方言を用ふる種族 *tribes* 第四に、合併によつて一個の氏族的社會として結合せる數個族種から成り同一領土を占めて居る人民又は國民である。この各種族は三部族より成り、各部族は三十氏族から成つてゐた。従つて、四種族は十二部族と、三百六十氏族との聚合であつた。この四種族は合併する前には聯合してゐたものゝ如くである。かく四種族は一の社會即ち人民を形成してゐたが、その社會は傳説時代に、アテネ人の各の下に完全に自治的<sup>1)</sup>になつた。

この氏族的社會全體の基礎は家、爐邊或は家族であつた。大きいにしる小さいにしる、その若干のものが氏族を構成したのである。

「各家族は彼等自身の神聖な儀式と祖先の祭祀とを行ひ、家族がそれを司祭するのであつて家族のもの以外には

1) Morgan; Ancient Society, pp. 221-2

誰も参加を許されなかつた。……氏族・部族及び種族と呼ばれる一層大きな團體は、同じ原則——家族を以て、固有の姓を有する或る共同の神や英雄を崇拜しまた彼等を共同の祖先と認むる宗教的同胞組織と考ふる——の擴大によつて構成されて居た。そしてセオエニア及びアパテユリア（前者はアツティカ種族の神であり、後者はイオニア種族全體に共通な神である）の祭祀は、これ等の部族及び種族の成員を、禮拜、祭典、及び特殊の同情維持の爲めに、年々集合せしめ、かくしてより小なる結びを殺すことなしにより大なる結びを強めた<sup>1)</sup>。

有機的社會組織の單位として氏族は、當然に社會的生活と活動との中心となつた。それは執政官即ち酋長及び出納官を有して社會團體として組織された。そしてある程度の共有土地、土右の墓地及び共有の宗教的儀式を有して居た。

部族はギリシヤ社會制度の第二組織段階であつた。それは特に、彼等すべてに共通の宗教上の目的のために結束せる數氏族より成つてゐた。年を経るにつれて一氏族が分裂し、その後また細分して作られた諸氏族は、全族員に共通の系統を與へ、また彼等が一部族に統一せらるゝ自然の基礎を作つた。かくの如き部族は自然的成長であり、またさればこそ部族は一氏族制度として説明せられ得るのである。かように結合された諸氏族は、兄弟の氏族である。

ギリシヤ種族の宗教生活は、氏族と部族との中心と源とを有した。これ等の組織内に及び組織を通じて、その諸神の位階と、古代世界の人心を力強く感銘させたその崇拜の象徴と形式とを伴へる、彼の驚くべき多神教の制度が完成せられたことを想像しなければならぬ。此神話は少なからず傳説時代及び有史時代の大事業を

1) Grote; History of Greece, iii, 55.

鼓舞し、且つ近世の世界が讚歎喜悅して止まざる神殿や裝飾的建築を作り上げたる、彼の熱情を創造したのであつた。<sup>1)</sup>

種族なるものは、各々氏族を以て構成せられたる、一定數の部族より成れるものであつた。各部族内の人々は同じ共通の系統であつて、同じ方言を語つてゐた。一種族内の諸部族が、彼等の宗教的儀式を舉行するために結合した時は、一種族としての彼等のより高き有機的組織であつた。彼等はいかゝるものとして a *Phylo-Jasienus* — その種族の最高首長である — の統轄下にあつた。バシリウスの職に伴ふてゐる祭祀及び司法的職分は、その傳説時代及び英雄時代に得たる威嚴を説明するかに見える。

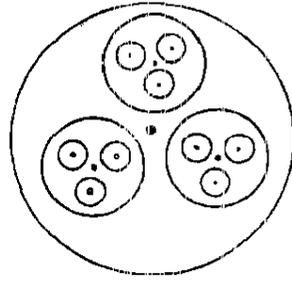
第四のそして最後の組織的段階は、一つの民族的社會に結束されたる國民であつた。アテネ人及びスパルタ人のその如く、諸種族が一民族に合併したる場合は、それは社會を擴大したが、然しその聚合體は單に一種族の更に複雑なる副本に副ぎなかつた。種族は國民の中に、部族が種族の中で、また氏族が部族の中で占めたと同じ地位を占めて居た。すべての氏族、部族及び種族は、完全に組織されたる自治體であつて、諸種族が一國民に合併せる場合、その結果たる政府は、その構成分子を活かして居る原則と調和して、測定されたのである。かくして達せられたる究極的事實は、ギリシヤ人はリカルガス及びソロンの時代に先だち、社會組織の四段階（氏族、部族、種族、及び國民）を有せるに過ぎず、これは古代社會に於ては殆んど普遍的であり、そして文明時代の開始されたる後も尙ほ存續せることが示されたことである。<sup>2)</sup>

以上に於て見られたギリシヤの民族的社會の構成は、共同體の本質について我々に教へるところが少なくない。

1) Morgan; Ancient society. pp. 239-240

2) Ibid. p. 242

これら家族、氏族、部族、種族、國民の各々は共同感情によつて結ばれて居るところの共同體である。而してこの共同感情は、中心的に共同祖先に對する崇拜として表現せられたることによつて保持せられるのである。次にこれ等の諸共同體は重層的關係に於てあるのであつて、より小なる共同體はより大なる共同體に於て自己を保持しその生を完ふするのである。云はゞ各々それ自身の中心點を有する圓の相重なる關係(上圖參照)に於て



現らはされ。次にこの民族的社會の生活の一切は、この共同體の地盤に於て爲されるのであつて、政府なるものもこの共同體的地盤の上に基礎付けられるのである。

かくて我々はこゝに共同體の四つの根本性格を見ることが出来る。第一は共同感情の原理とする共同性であり、第二はこの共同感情の中心性であり、第三は諸共同體相互の重層性であり、第四は共同體の基礎性である。こゝに見られた根本性格は、具體的な共同體の有する根本性格であつて、この性格の或ものを失ふ時、その共同體は抽象的となり行くのである。

かくの如き共同體がアテネ其他の都市國家を構成したのであるが故に、それ等の國家は實質的に國民共同體であつた。

かくこの國民共同體の地盤は血族共同體であつたが、有史時代に入つて、この地盤が地域的な共同體に轉化した。而も前述せし共同體そのもの、根本性格は、保たれたのである。

即ちクレイセネスの立法の結果、氏族、部族、及び種族は、彼等の勢力を奪はれた。これその勢力が彼等から奪はれて、爾來一切の政治的權力の源泉となれる而も同じく重層的構成をなせる、デイーム、地方的種族、及び

國家に授けられたからである。然しながら彼等はこの顛覆の後さへも解體せられずして、家系と血統として、且つ宗教生活の源として、數世紀間も残つてゐた。

政府の形態については、氏族社會に於ては、パンリウス、酋長會議、人民會議があつたが、クレイスネスの作つた政府の形態に於ては、酋長會議を選舉制元老院に保有し、そして人民會議を衆議院に保存したが、行政長官の職を廢止してしまつた。こゝに政府形態の民主主義化が行はれたのであつて、人民會議が權力の實權を掌握しアテネの運命を指導してゐた。國家に安定と秩序とを與へた新要素は、その完全な自治制と地方自治權とを有せるデイームであつて、同じやうに組成されたる百デイームが、聯邦の一般的運動を決定した。アテネの人を人類有史諸民族の間の最高位に陞らしめたる驚くべき天才と智力との發達は、この民主的制度のインスピレーションの下に起つた。

而もこの民主的制度は、市民社會の發達に伴ふ貧富階級の分裂對立の増大と共に、一國の政治をも階級的分裂對立の混亂に陥れ、その存立を危からしむるに至つた。

この個人主義的に崩解し行かんとする當時のアテネに於て、ソフィストはこれを是認して個人主義の立場に立ちプラトーンはこれに對立して徹底的な國家主義的立場を主張し、アリストテレスはこの兩者を止揚して共同體的立場を主張した。<sup>1)</sup>而してこのアリストテレスの共同體思想は、前述せしギリシヤの共同體的事實に即してはじめて十分に理解し得らるべきものである。

即ち「國家にしる其他のことにしる事物をそれが最初の生長に於て考察するものは、それについて最も明確な

1) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第四九頁以下參照

る見解を得るであろう」となす彼は、政治學の初めに於て先づ國家の成立を考察して次の如くに述べて居る。「家族なるものは、人々の日常の欲求の充足の爲めに、自然によつて打立てられる結合である。……然し數多の家族が結ばれ、結合が日常の必要の充足以上の事を目的とするならば、形成される最初の社會は村落である而して村の最も自然的な形式は、家族よりの植民の形式であろう。それは同じ乳によつて哺ぐまれたと云はれるところの子供達並に孫達から成るところのものである。而してこれが、ギリシヤ諸國家が本來諸王によつて支配せられた理由である。何となればギリシヤ人は彼が一緒になる以前に於て王の支配の下にあつたからである。……總ての家族は最年長者によつて支配される。それ故に家族の植民地に於ては、彼等が同じ血を有するから、支配の王的な形式が行はれる。ホーマーの云へる如く各人はその子並に妻に法を與へる。……數多の村が、殆んど又は全く自足的であるに十分なる大きさの單一な完全な共同體に結合されるならば、國家が存立するに至る。それは生活の單なる必要に發しながら善なる生活の爲めに存続する。それ故に社會のそれ以前の諸形式が自然であれば國家も自然である。何となれば國家はそれ以前の諸社會形式の目的であり事物の本質はその目的なるが故である總てのものがその十分に發展した時にあるところのものを、我々はそのものゝ本質と呼ぶ」。

このアリストテレスの國家成立論に於ては、前述せしギリシヤの國民共同體の成立過程が正に見られる。而してそこには國家に於ける諸共同體の共同性、中心性並に重層性がよく云ひ現らはされてゐる。

かくて國家なるものは、人間社會の發展が自らそれへと到達すべきところのものであつて、その成立の事情の如何に拘らず善なる生活の爲めに存続することがその本質である。本質的なこの國家の状態を、アリストテレス

は次の如くに述べて居る。「國家なるものは共同なる場所を有し相互の罪惡の防止及び交換の爲めに建てられた單なる社會でない」と云ふことは明である。此等のものはそれなくしては、國家が存立することが出来ない條件である。然しそれ等のものが總て寄つても、國家即ち諸家族の共同體並に福祉に於てある諸家族の集合であり、完全な且自足的な生活の爲めであるところのものを構成することは出来ない、さような共同體は同一場所並に相互の結婚關係に於て生活して居る人々の間に於てのみ成立し得る。是によつて諸都市に於ては、家族的諸結合、同朋關係、共同犧牲、人々を共に集めるところの共同愉快が起る。然し共に生きんとする意志が友誼であるから、これ等のものは、友誼によつて創造されるのである。國家の目的は善なる生活であり、これ等のものは善なる生活への手段である。而して國家は完全な自足的な生活に於ける諸家族並に諸村落の結合であつて、完全な自足的な生活とは幸福な而して高尚な生活を意味する。」<sup>1)</sup>かくてまた「そこに於ける總ての人がその何人たるに拘らず、最善に行爲することが出来而して幸福に生活することが出来るところの支配の形式が最善なるものであることが明なのである。」と述べて居る。

このアリストテレスの國家の本質論に於ては、共同體の共同性、重層性並に基礎性が明にされて居る。而してその共同感情は單なる本能的なものではなく、その成員の總てを人間として完成せしめんとする自覺的な人間愛である。こゝに原始的な共同體の自覺的な共同體への向上が示めされてゐる。而もこの人間愛は、爲政者の務として高調されて居り、國民自體の共同感情並にその中心的表現としては十分現れて居ない。これ今や民主化されつゝあるギリシヤ共同體の表現たる所以である。

1) Aristotle; *Politica*. 1280b-1281a

アリストテレスの思想は、ギリシヤの共同體的生に最もよく即するところの最も具體的な共同體思想であるがプラトリーの國家主義思想もギリシヤの共同體の事實の上に成立てるものとして共同體的な構成を有してゐるのである。即ちプラトリーの理想社會の思想は、具體的な共同體の重層的構成を無視してこれを平面化し國家權力化したものとして考へることが出来る。かくてそこには家族なるものが否定されて、妻子財産の國家單位に於ける共有が主張されて居る。このプラトリーの思想にとつて直接の生的地盤を提供したものはスパルタであるが、ラヴレーはこのスパルタの財産制度について次の如くに述べて居る。

「ローマ人の絶對所有權の觀念は、希臘に取つては常に風馬牛のものであつた。國家の領土は國家にのみ屬するものと見なされて、市民は單に一般的福祉に從屬する使用權を有するに過ぎぬ。」スパルタは、その歴史にはじめて現れた頃、既に原始共產制を廢止した。そして明かに、氏族共有制度に到達してゐた。原始共產體はスパルタの社會組織に深い足跡を残した。家族的財産と相並んで、ドイツのアルメンドの如き共有地が存在した居た、各人がその割前を受けて居たことがありそうに思はれる。またスパルタは廣大な共有地を有しその生産物の幾部分は公共の饗宴の維持費に役立つた。<sup>1)</sup>

かくの如く、スパルタに於ては尙ほ原始共同體に見られるが如き財産の共有其他が、國家單位に於て見られたのである。當時アテネの國家が社會的原子に分解されて居た有様を見、諸利益が互に葛藤せる様を目撃して居たプラトリーは、ソフィストとは正に反對に、統一的な國家目的に對して、總ての個々人の利益及び力を極度に集中することを必要であると考へたのである。この立場よりスパルタの共同體的事實を重んじこれを徹底して彼の理

1) Émile de Laveleye; De la propriété et de ses formes primitives. Chap. XXV

想國家なるものを考へて居るのである。かく妻子財産を共有として國家の單一性を強化せんとするプラトーンに對してアリストテレスは、「國家の單一性が大なれば大なる程善なり」となすプラトーンの前提論を不可なりとし、國家の統一と云ふことは、云はゞ性質の異なる諸音の調和律であるべきであつて、これを單一音化し行くことは國家を墮落せしむることであるとしたり。

このプラトーンとアリストテレスとの相異に於て、我々は共同體の共同精神につき、單に全體的關心に於てあるものと、明に總ての成員の完全を以て全關體的心とするものとの相異を見るのである。こゝに共同體精神自體の發展が見られるのである。

### 三

ヨーロッパ思想の重要な地盤は、古典ギリシヤと近世の西歐であるが、この西歐文化全體の地盤を築いた原始民族はゲルマン人であつた。即ち「このゲルマン人が世界史の進行に對して爲した巨大な業績は、西ローマ帝國の破壊と近代的世界の精神文化が基くところの諸國家の建設であつた。彼等の本質のあらゆる特質が、この大きな史的過程のうちに活動してゐる。」<sup>1)</sup>かくて西歐諸國民については先づ、ゲルマンの有史前の社會が考察されなければならぬ。

タキトウスは一世紀の末にこのころまで保存されて居たゲルマン諸民族の文化狀態について最も重要な史的證據たるゲルマニアを公表したのであるが、この時代までには、未だローマの影響によつてその文化が核心まで變

1) Dilthey, Deutscher Dichtung und Musik. 1933 S. 46

更されるに至つて居なかつた。ヘーゲル以後の最も秀れた精神史家と云はれるデイルタイは、この時代に至るまでのゲルマン人の精神文化の状態を彼の秀れた研究方法である「生」と「表現」と「理解」との関係に於て究明して居る。即ちモルガン等が古代社會の組織を主として云はゞ外的に明にしたるに對し、これは共同體の根本原理としての共同精神に立つて古代社會の諸文化を云はゞ内より明にして居るものとして、單にゲルマンの社會についてのみならず、古代社會一般の性質を明にする上に特に重んぜらるべきものである。

土地經濟と戰爭との結合が當時のゲルマン族の生活を規定してゐたが、なほ他の契機が彼等の存在の深みから現れて來る。先づ共同體の根本原理たる共同性に就てであるが一個々人は生活とその目標についての如何なる反省によつても慣例と風習と共同精神 Gemeingeist の規律するところのものを踏み越えると云ふことがなかつた。個々人は民族共同體 Volksgemeinschaft に同化してゐたであつて、共同體の力と幸はまた彼等のものであつた。而も、個人もまた共同體の活動力ある構成部分としてその價值をみとめられてゐたのである。その慣例・風習・人生觀・理想は凡ゆる個々人の心的態度を決定する。かうして民族共同體は一箇の總意 Gemeinwille によつて滿されてゐる。彼等は、この總意を、慣習法によつて規定されたある簡單な憲法によつて、民族朋輩の集會において發見し實現する。」<sup>1)</sup>

こゝに共同體を共同體たらしむる本質がデイルタイによりよく現らはして居る。即ち共同體の根本原理は共同精神であつて、個々人はこの共同體に同化して居りその共同精神を以て充されて居る。故に個々人の關心は共同體的關心であつてこれをはなれて個々人の關心なるものはない。かく共同體的精神に充されて居る個々人が、

1) Ibid. S. 21.

共同體の活動力を成して居るのであつて、個々人はかゝるものとしてその價値を認められて居る。而もこの共同體精神の關心するところは、共同體全體についてのであつて、それは共同體の全成員によつて求められたところの共同體の總意である。かくてそれは權力國家に於ける權力者の意志ともまた階級社會に於ける支配者階級の意志とも異なる。ドイツ人はかゝる共同精神を原理とし共同體生活の一切をその表現として把握する。

次にこの共同體の社會組織についてであるが、この社會の單位は、本質的には一夫一婦的な家族 *Family* である。家族は、氏族 *Stipe* なるもつと遠い血縁者との間に、もつとも近い經濟的、法律的、政治的の團體關係を結んでゐた。氏族は、インドゲルマン諸民族に於ても亦、歴史的に遡り得る限り最古の段階において發見せられるところの社會關係である。ゲルマン人に於ては、それは經濟生活に、軍事組織に、法律に現れ、また彼等の詩をみたす感情を規定してゐる。氏族の平和の攪亂は重大な犯罪であつた。氏族はその氏族に屬するものの殺害を復讐し、その贖罪を強要する義務があつた。家族とより廣い範圍の血縁者が軍事的に組織されてゐたと云ふことはゲルマン人の軍團における團結心と勇敢性のために甚だ効果があつたことが知られる。軍隊の組織と同様に、移住も亦あきらかに先づ血縁關係によつて定められてゐた。かうして、氏族より百人隊や千人隊の、氏族團や部族の連繫が、民族國家 *Volkstaat* に導かれる。民族國家は當時のゲルマン人の政治的單位であつて、その大きさは餘り大きいものではなかつた。従つて彼等は餘り大きな範圍の政治團體の有つことの出來ぬ祝福を享受した。この現象は、最古のギリシヤやローマの都市國家の原始時代にも見いだされるものであつて、民族成員相互間の強固な結合や、鞏固な風習と慣習法による組織や、民族成員に對するその行動の可視性に基く男子の名譽がそれ

であつた。また總ての民族成員が彼らの最も重要な事項の協議と決議のために民族會議に招集されることが出来た。しかしながら、早くから商業と藝術熱が發展した地中海岸において都市國家が形成されたやうに、このゲルマン人の民族國家の性格も戦争によるその規定の傍に土地への關係をもつてゐた。土地所有權の戰鬪的な獲得が共同的に行はれたやうに所有權もまた民族に歸してゐた。家族經濟には、年々耕作のために土地が委託せられ餘りは郷の朋輩 *Markgenossen* による共同使用のために保存せられてあつた。<sup>1)</sup>

こゝにギリシヤの共同體に於て見られた如き重層的構造が見られてゐる。次に政治生活について述べられる。

この民族國家の憲法は、民族全體と部族の集會が協議し決議した。民族國家が單に戰時のみに止まらず絶えず首長又は主の指揮 *Leitung der Häuptlinge und Könige* の下に在つた場合にも、最も重要な事項の決定は彼等によつて行はれた。媾和、宣戰の決議は全民族の集會に於て行はれた。一定の司法的機能も彼らに委託されてあつたそれは根抵に於て民族國家の決定力であつた。王は主として、その指導と彼らの決議の執行と戰時における指揮を托されてゐたのである。民族會議は、しかし、民族國家の共同精神が要求するもののみ發見し表現することができた。<sup>2)</sup>

法律も亦、民族共同體の生命活動であつた。それは不文の慣習法であつた。その生ける源泉は、個人、生活關係、團體の價值の一樣な査定にあらはれてゐる民族の共同精神であつた。それは戰鬪能力ある民族成員の集會に於て發見せられ宣告せられたものであつたから、民族法 *Volkrecht* であつた。内容的には、この法律は、この最古の歴史的組織の光によつて明にされた時代即ち人か自己を家族より民族國家に至るまでの直觀的に與へられた

1) Ibid. S. 23  
2) Ibid. S. 24

團體の生ける成員と感して居つた時代の大きいなる原理によつて支持されてゐる。共同體は家長に耕作用の土地を分配した。その用益權は同時に防禦の義務を含むところの職務でもあつた<sup>1)</sup>。

かくこゝに於ては政治生活の一切が共同精神の表現として把握されてゐる。次に精神的文化の創造について述べられて居る。「個人を越ゆる共同精神の力は、この段階の第一の特相である。従つてこの時期のゲルマン人は、ただ共同精神が創造する領域言語、宗教、傳説、詩に於てのみ創造的に働くことが出来たのである。心生活の様性、共同精神が支配する限り、民族は言語と神話に於いてその最大の創造時代をもつ、精神文化の根基は、この時期に在つては、視えざる勞作に於いて擴大し行く。しかるのち漸進的分化、分業、個人的發展に於いて段階的に藝術、哲學最後に科學が發達する。一樣なる共同精神の支配のうちに、恰も言語と神話における共同創造 *das gemeinsame Schaffen* の條件がある。個人はまた民族共同體の中に消失してゐる。その創造は民族共同體の一般的情調 *die allgemeine Stimmung* によつて支持せられてゐる。」<sup>2)</sup>かく精神文化の創造も共同精神の表現として把握されて居る。

以上デイルタイの述べるところのものは有史前のゲルマン人の共同體を明にするのみならず、更に有史前の共同體一般の精神的構造を明にして居る。即ちこの共同體に於ては共同精神が根本原理であつて社會、經濟、政治精神文化等の一切のものはこの共同精神の表現として明確に把握されるのである。

このデイルタイによつて明にされたところのものは、共同體の本質の鮮明にとつて重んぜらるべきものである。このことはマルクス派に於ける共同體の本質觀と對比することによつて特に明にされる。即ち經濟的存在を以て

1) Ibid. S. 25.

2) Ibid. S. 27.

人間の存在の「眞實の土臺」 *reale Basis* となし、他の一切の文化はこれが上部構造であつてこれにより規定されるとするところの唯物史觀の立場に立つたマルクス及びこの學派に於ては、原始共同體の本質をも財産制度について、共產主義に於て見たのである。かくて彼等は原始共同體を以て原始共產體 *Gütergemeinschaft* と名づくるのである。このマルクス派の影響は大であつて共同體なるものを共產體として考へる人々が少なくない。こゝに共同體自體が物化されてゐることになる。かく共同體の本質を共產制に於て見るか又は共同精神に於て見るかの相違は、只に歴史的研究にとつてのみならず更に現代の實踐問題にとつて重大な意義を有するのである。

デイルタイにより明にされたる共同體の構造に於ては個に對立する全もなくまた全に對立する個もなく、個と全とは共同精神に於て一體となつて居る。それは個と全との未分前の一體の調和である。今この共同精神より全が遊離して行くならば全體の權力が個々人を一方的に支配するに至り、こゝに國家權力主義が現れ來ることゝなる。また個が共同體精神より遊離し來れば、こゝに個人主義社會が現は來ることゝなる。ギリシヤの共同體の發展方向は後者であつたが、民族大移動はゲルマン民族をして前者の發展方向をとらしめることゝなつた。

即ち民族移動と定住の諸世紀は、ゲルマン民族の精神生活に著しい變化をあたへた。凡そ二世紀頃より隣接、類縁、移動と戦闘に於ける合併と征服によつて部族統一體が出來あがる。そして六世紀即ち民族移動の終りには、アレマン人、フランク人、サクソン人、フリース人、チューリンドン人の諸部族が並立する状態が見られる。政治的秩序や法律、慣習の方面にも變更が行はれる。それは、國外のローマ領内に占據したゲルマン人たちの間から行はれはじめた。王權の威力は *Die Macht des Königimas*、大きな戦士的事業の行はるにつれて増大した。

外國に於ける支配權なるものは、ただ權力が一手に集中してゐる強力な王の人格 *starke königliche Persönlichkeit* によつてのみ維持せられ得るものである。しかのみならず、ローマ皇帝によつて育てられた屬州の奴隸根性は、しかのみならず、宮廷、生活の外面、浮誇と諸侯と臣下との距離を要求した。<sup>1)</sup>

この國權的な發展方向は、神聖ローマ帝國の建設にも向ふものであるが、それが生の共同體的構成に對し決定的な結果を齎らすに至つたのは、重商主義の段階に至つてである。即ちシュモラーは「この主義の本質は、貨幣又は貿易均衡の理論に存しないし、關稅障壁、保護稅、航海條令にも存しない。即ちそれは、社會とその組織の並に國家とその諸制度の全般的變遷に於て、國民國家の經濟政策による地方的領土的經濟政策の排除に於て存する<sup>2)</sup>」と述べて居る。これまで經濟生活の單位は、氏族、村落、都市、地方的領土、へと發展し來つたのであつて、今やこの地方的なるものより國民的なるものへの發展のなされるに至れる事情が、詳述されてゐる。而してこの運動がはじめられ催進されたのは十七八世紀の多かれ少なかれ專制的君主によつてであつた。かくて「重商主義の諸理想は、實際上は、完き國家並に完き國民經濟の創造に對する力強き鬭爭、並に地方的州的の經濟的諸制度の顛覆に對する力強き戰であつた。」<sup>3)</sup>と述べて居る。而もこゝに注意すべきことは、經濟單位のこの國民單位への發展の有せし破壊的性質である。即ちこれまでの發展に於ては氏族、村落、都市等の共同體的性質が或程度まで保たれて居たのであるが、今や強力な中央集權的國家權力によりこれ等共同體的なるものが決定的に破壊されて行つたのである。かくてこれ等共同體より遊離されるに至つた個人は、この強權に力無く支配された。而もやがてこの個人はこの強權に對し自己を防禦し更に進んで社會的に結成してこれに對抗するに至つた。これ市民社會

1) Ibid S. 51.

2) Schmoller; The mercantile system and its historical significance. p. 51.

3) Ibid. p. 76.

の勃興であつて、こゝに今や在來の共同體的要素は更に個人主義化されて破壊され行つた。

かくて、これまでの共同體的な生の構成が失はれた西歐の生に於ては、國權的なものと社會的なものとが對立してゐるのである。そこにはこの西歐的な生の地盤に於て成立せし支配的な思想は、當然に國權本位の思想と社會本位の思想とであつて、具體的な共同體思想の成立し得る地盤が缺茹して居るのである。従てそこに於て成立せる共同體思想例へば有産者の支配する社會と權力國家とを否定して共同體を實現せんとせし、ルソオ並にクロポトキンの思想も、それが國家權力主義に對して個人主義社會の勃興しつゝあつた生的基礎に於て成れるが故に、その共同體思想は個人主義化され社會化されざるを得なかつたのである。即ちルソオは、*volonté general* を原理として國民單位の共同體を考へ、政府其他一切をこれに基礎づけたが、この *volonté general* は *Contrat social* により成るものなるが故にこの共同體は眞の共同性、中心性、重層性を缺茹して、社會化されて居る。またクロポトキンは、ロシアの農村共同體の體驗より出發したが、而も將來社會を *free agreement* に基く *co-operative* 並にその自由聯合として考へたが故にこゝにも眞の共同性、中心性が缺茹し共同體が社會化されてゐる。かくて原始共同體との聯關が中斷されるに至つた西歐の生に於ては、具體的な共同體思想の成立することが出来なかつたのである。西歐より今日まで我國に取り入れられたる思想が主として社會本位の思想並に國權本位の思想であつた所以は、實にこゝにある。

#### 四

- 1) 拙稿『民約論に於ける共同體思想』(昭和十二年十一月號)『共同體の人間學的考察』(昭和十三年一月號)参照。
- 2) 拙稿『共同體思想の國民的性格』(昭和十三年三月號、四月號)参照。

之を要するに古典ギリシヤに於ては原始共同體の共同體的性格が繼續的に發展し來りその生が共同體的に構成されて居りその上に於て秀れた共同體的思想が成立つた。然るに近世社會思想の地盤としての歐洲に於ては、國家權力が原始共同體の共同體的性格を破壊したが故に、その生は共同體的性格を全く失ひ、従つてこの非共同體的性格の生の上には國權本位思想とこれに對立する社會本位思想とが支配的となつたのであつて、秀れた共同體思想の成立は見られなかつたのである。

我々は進んで以上の考察と對比せしめることにより日本に就て考察しなければならぬのであるが、こゝに於ては原始共同體の共同體的性格が保持せられたのみならず、獨特の發展をとげたのであつて、この共同體的性格が我國體をなし、この共同體的生の上に我國特有の共同體思想が成立つたことが明にされる。ギリシヤとゲルマンとの原始共同體について見られた共同體の根本的性質たる共同性、中心性、重層性、基礎性は、我國の共同體についても亦見られるのであつて、これにより我國の共同體の獨特の發展の仕方、これより結果する我國民共同體の特有な構造、更にこれに基く我共同體思想の特色が、明確に規定されるのである。